



須貝みさき
(沖縄県立子ども医療センター 医師)
プロフィール

26歳で医師免許取得。28歳時、往診中に追突事故に遭い頸髄不全損傷を負う。小児科医として、途上国で子どもの感染症の診療や予防の仕事をしたいと思っており、事故の数ヶ月前にもカンボジアのアンコール小児病院を訪ねたところだった。受傷後2年半の間に、将来の生活の場として思い入れのあったカンボジアを3度訪れる。何もかも喪ったと感じ、もとの体に戻る努力をすることがすべてだと思っていた事故当初から、自分の障害に対する捉え方が少しずつ変わり、車いすを使って動き、必要なサポートをリクエストできるようになるまでの葛藤と軌跡を、カンボジアへの旅を通して追う。2009年3月よりあらためて復職に挑戦。(受傷後カンボジアに恩師を訪ねた時の生活：
<http://www.mumyosha.co.jp/ndanda/07/cambodia05.html>)

2007年3月(受傷後5ヶ月):
歩行器レベルで退院し復職を試みたものの、体が今までと違うことに戸惑い、周囲の理解を得るのも難しくほどなく挫折。もとの自分を思い出そうと、カンボジアへ。車いすという選択肢には全く思いが及んでおらず、歩くことにこだわって2ヶ月の旅の間どこにいても、休むための「いす」を捜し続けた。アンコール小児病院を再訪し、かけよってくる子どもを抱きあげた時に、抱く力があるということに気づく。この病院の小児科医でよき理解者 Dr. Chheng に出会う。「ゆっくり歩けばいいし、疲れたら休めばいい。だめそうだったらいつでも戻ろう。」と勇気づけられ、もう二度と訪れることはないと思っていたアンコールワットを、再び歩ききる。



…できなくなると思っていたことの中に
できることがあるはず。全ての
自信を喪くさなくてもいい。
あせらず、希望を失わず。

2007年9月(受傷後11ヶ月):
場所を替えて復職に再度挑戦するが、歩くのに時間がかかったり、疲れやすかったりと思うように働けず、自分を追い詰める。体の痛みやしびれを耐えがたく感じ、何度か自殺しようとした末に、再びカンボジアへ。成田空港の手荷物チェックで動けなくなり「クルマイスニノセテクダサイ」と頼む。これが初めての車いす。係員から「ここまで歩いてきたのに、どうして車いすが必要なのですか」と問い詰められ、悔しさ、惨めさ、申し訳なさ、周りからの視線で涙がとまらなかった。ところが乗り換えのタイ国際空港では、にこにこした空港係員が「ハイみさき、君を待っていたよ!」と出迎えてくれた。一方カンボジアの空港に着くと、なんの愛想もない係員が、クメール語で「乗れ」とぼろぼろの車いすを指差す。車いすに乗ることがなんら特別ではないと感じ、心地よかった。デング熱の流行しているアンコール小児病院へ。おおらかなカンボジア人スタッフに受け入れられ、ただただ子どもたちのことを考えて過ごす。受傷後2度目のアンコールワットでは、Dr.Chheng は以前のように私をてっぺんまでは登らせず、黙ってぐるりと遠回りをするので、今までとは全く違う表情のアンコールワットを魅せた。そこは果物の木が鬱蒼と生い茂り、花が咲き、水を汲む人やお寺にお参りする人がいて、子どもたちの笑い声がするなだらかな道だった。



…すべてが今までどおりでなくても。必要なサポートは
使えばいいし、期せずしてちがう道を通るのも悪くはない。
車いすの自分を認めた旅。



2008年7月(受傷後1年9ヶ月):

2008年3月より車いすを使い始め、初期研修を終える。大学病院に勤務中、車いすではほとんど診療に参加できず、研修終了と同時に退職。日本を出て生活・就職しようと思い、迷わずカンボジアへ。社会復帰できずにいることに焦り、人の手を借りることに負い目を感じていた。プノンペン郊外にある、障害児のための孤児院を訪れる。脳性麻痺、聾啞、盲などの100人ほどの孤児が生活する施設。ここで働くペル人シスターMs.Juanaの言葉に、はっとする。「どの子ども、どんなことにも挑戦できる。でもね、できることができないことより必ずしも優れているとは限らない。一見人の手を多く借りているように見える子が、まわりにもっと多くのものを与えていることがある。結局のところ、誰かに支えられて生きる分量と、誰かを支えて生きる分量は、誰もそんなに変わらないのかもしれない。だから、どの子ども大事。生きていてくれるだけで。」



…今の自分とけんかしない。できないことがあってもいい。
私だからできること、伝えられることがあるかもしれない。

2008年8月(受傷後1年10ヶ月):

車いすSIG講習会に参加するため帰国。リハ工学カンファレンスで、はじめて同じ障害を持つ人や、車いすユーザーに出会う。違和感を持たずにいられる場所が日本にもあることを知り、車いすで小児科医として復職できる場所を捜しはじめる。2009年3月より沖縄県立子ども医療センターで、もう一度復職に挑戦する。

…この自分が自分なんだと
思えたり、思えなかったり。
迷走はこれからも。



(沖縄県立子ども医療センター 2009/2/8 撮影)